

## 二重の欺瞞，または，苦しむ恋人たち（1）

小林潤司 杉浦裕子 高根広大 山下孝子 大和高行  
（共訳）

### 凡 例

- (1) 本翻訳は、ルイス・ティボルド（Lewis Theobald）が1728年に刊行した戯曲『二重の欺瞞，または，苦しむ恋人たち』（*Double Falsehood or The Distressed Lovers*）の日本語訳である。5名の共訳者は鹿児島近代初期英国演劇研究会のメンバーである。本号には序詞（Prologue）と第1幕の翻訳を掲載する。翻訳の第1稿を、小林（序詞～第1幕第1場）、杉浦（第1幕第2場1～112行）、高根（同113～224行）山下（第1幕第3場）が分担して作成し、メンバー全員で検討して、修正を行なった。この修正版を基に、小林が表記や表現を調整し、全体の統一を図った。第2幕以下は、本論集に漸次掲載する予定である。
- (2) シェイクスピア（William Shakespeare）は、セルバンテス（Miguel de Cervantes）の『ドン・キホーテ』（*Don Quixote*）の一挿話に取材して『カーディニオ』（*The History of Cardenio*）という戯曲を、ジョン・フレッチャー（John Fletcher）と共作したと推定されている。この戯曲は、そのテキストが今日まで伝わっていない、いわゆる「失われた戯曲」の一つなのだが、ティボルドによると、『二重の欺瞞』は、自らが所蔵する、『カーディニオ』の手稿を底本に、ティボルド自身が改訂・改作した脚本であるという。1728年の刊本の扉には「W. シェイクスピアによって原作が書かれ、このたび『復元されたシェイクスピア』の著者、ティボルド氏の改訂と改作を経て上演された（Written Originally by W. Shakespeare; / And now Revised and Adapted to the Stage / By Mr. Theobald, the Author of *Shakespeare Restor'd*）」と記されている。このティボルドの言い分は、発表当時から最近まで、到底信ずるに値しない虚言と見なされるが多かったが、近年風向きが変わり、2010年に第3アーデン版シェイクスピア全集の一冊（Brean Hammond, editor. *Double Falsehood or The Distressed Lovers*. The Arden Shakespeare Third Series. Arden Shakespeare, 2010）として刊行され（以下、アーデン版）、事実上、シェイクスピアの正典に準ずる作品として「認定」されたことから（編者のハモンドは、シェイクスピアとフレッチャーによる原作をもとに王政復古期に作られた改作版をティボルドがさらに改作したものと推定している）、その成立と作者について、さらにかまびすしい論争を巻き起こすことになった。本翻訳は、この論議をめぐる特定の見解に与して公刊するものではない。現在も進行中の議論を理解し、また、この議論に参加するための参考資料として、この試訳が広く活用されることを期待するものである。

---

キーワード：ウィリアム・シェイクスピア，ジョン・フレッチャー，ルイス・ティボルド，『カーディニオ』，『ドン・キホーテ』

- (3) 翻訳の主たる底本としては、アーデン版を用い、1728年の刊本を、ECCO (Eighteenth Century Collections Online) によって適宜参照した。ハモンドによるアーデン版の注釈には教えられる点が少なくなかったが、その解釈や見解にあえて従わなかった箇所もある。
- (4) 行数表示は、原文テキストとの照合の便宜を考慮して、アーデン版に準拠している。訳文の行数と行数表示の間に部分的に不整合が見られるのは、散文の台詞の行分けが、アーデン版本文と訳文とでは必ずしも一致していないという事情による。
- (5) 訳出には共訳者一同、最善を尽くしたつもりだが、解釈においても表現においても、不十分な点がまだ多く残されているかと思う。いずれ機会をとらえて、より完成度の高い訳を公刊したいと考えているので、読者の厳しい批正を歓迎する。

## 二重の欺瞞，または，苦しむ恋人たち

### 登場人物と初演の配役

ドルーリー・レイン劇場 (1727～28年)

#### 男性人物

公爵アンジェロ	ジョン・コーレー
ロデリック，その長男	ジョン・ミルズ
エンリケ，その次男	ロバート・ウィルクス
ドン・バーナード，レオノラの父	ジョン・ハーパー
カミロー，ジューリオの父	ベンジャミン・グリフィン
ジューリオ，レオノラの恋人	バートン・ブース
	チャールズ・ウィリアムズ (初日から4日目まで)
市民	ジェイムズ・オーツ
羊の飼い主	ロジャー・ブリッジウオータ
第一の羊飼い	ヘンリー・ノリス
第二の羊飼い	ジョン・レイ

#### 女性人物

レオノラ	メアリー・ポーター
ヴィオランテ	ヘスター・ブース

プロローグ  
序 詞

フィリップ・フラウド様が執筆し、  
舞台ではウィルクス氏が語った。

恵み深い気候が大地を肥やし、  
無数の草木が豊かに繁茂している  
地域があります、無数の風景が  
不揃いの美で私たちの目を奪い、  
こちらにあちらにと次々目移りするような。  
それでも全体で、ひとつの美しい原野を構成しているのです。  
シェイクスピアの天才もまた同じ。ブリテン人たるもの、  
同じ国に生まれたことを誇り、われ勝ちにその詩を  
褒め称えるがよろしい。名声というトロフィーを  
彼に向かって掲げることが、すなわち自分たちを称賛することになるのですから。 [10]  
ブリテン精神の多芸多才ぶりを誇示するのです。  
そこではすべてが偉大で、伸びやかで、開けっぴろげで、無制限なのです。  
シェイクスピアが恐れを知らず飛翔した高みにまで到達し、  
彼のみが描き得た美を味わうことを、私たちの誇りとしましょう。  
今日の作家の多くは、高みに昇ることを恐れ、  
模倣にかまけることで、天才の<sup>ほむら</sup>焰を揉み消してしまっているだけなのです。  
整然と分けられた見取り図から片時も目を離さず、  
均整とつまらぬご体裁に固執しているのです、  
高貴なる自然をすっかり<sup>なごり</sup>等閑にして。 [20]  
自然よ！ 万物に先立ち、  
完璧さの基礎をなし、至高の恵みであるものよ！  
自然と親しく交わったシェイクスピアは、  
その最初に湧き出す泉から様々な感情を汲み出しました。  
迸り出る感情の勢いは、最も激しい時こそ真に迫るのです。  
今日の作家たちが批評家の教えを固く信じ込み、  
奴隷の掟に違反する危険に終始戦々恐々としているのに対し、  
シェイクスピアの広大で自由な魂は批評家たちの規則をものともせず、  
群れなす学者先生たちの教えをはるか眼下に見下ろすのです！  
ああ、劇聖シェイクスピアが、私たちに照らす光のなかに甦り、  
今夜、その影に浴びせられる喝采を受けることができたなら。 [30]  
当世の舞台がシェイクスピアの祝福を授かれれば、  
かのイライザ（エリザベス一世）の黄金時代を凌ぐでしょう！  
偉大なるオーガスタス（ジョージ二世）がブリテンの王座に<sup>いま</sup>坐し、

最愛の王妃が詩神を意のままにお使いになる今日、  
シェイクスピアは、自身の名声が甦り、真に優れた作家の  
当然の要求が満たされるのを見て喜ぶでしょう！  
そして誇らしげに叫ぶでしょう、「忘却を私は咎めない。  
この我が末っ子は末代まで生き<sup>ながら</sup>存えるのだから。  
一度はこの世で迷子になっても、その誕生を待っていた。  
このめでたき<sup>みよ</sup>御代まで敢えて先送りにされた誕生を」と。

[40]

幕が開く。

### 第1幕第1場 王宮

公爵アンジェロ、ロデリック、廷臣たち、板付きで登場。

ロデリック 父上、いつにないこの気持ちの訪れによって  
わが心は悲しみにくれています。

公爵 なにを言うか？

わしが自分の死について口にしたからと言って、  
墓穴を掘る時期をわずかでも早めるわけではない。  
栄誉の花冠を戴く期間が長くなってしまったので、  
萎<sup>しお</sup>れてしまう前にお前の額に戴かせたいと思うのだ、  
花々が生き生きと咲き匂っているうちにな。お前こそそれに値する人物。  
公爵の位とともにわが高潔なる人格を引き継ぐ立派な後継者なのだから。

ロデリック お褒めの言葉を聞いて、誇らしくも思いますが、赤面するばかりです。

公爵 ロデリックよ、お世辞でこんなことを言っていると思うな。

[10]

愛情の重みが正当な判断を覆しているわけでもないぞ。  
曇りなく過去を映し出す記憶の鏡のように、お前は、  
若き日の私の美德の数々を生き写しに映し出している。  
年老いて滞りがちだったわが血も有頂天になって脈々と流れ始めたぐらいだ。  
それに比べて、愚かなエンリケ、手に負えぬお前の弟ときたら、  
その名の大きい<sup>ぼくち</sup>なる信用を博打の賭け金に注ぎ込んで、  
父の期待と自分の生まれに相応しい生き方をする努力を怠っている。  
あいつの放蕩という汚点は一門の潔癖なる名誉心を傷つけているのだから、  
速やかなる撤回が必要だ。

ロデリック きっと弟は、  
頭を冷やして知恵を取り戻しさえすれば、

[20]

ほどなく、若さの向こう見ずな暴発をすっかり精算して、

金無垢きんむくの品行で人望を勝ち得るはずです。

公爵 そんなことを言ってくれるお前が，すべてお見通しの予言者であってくれたら！

だがわしは，あいつの計り知れない無思慮な生き方を恐る恐る秤にかけて，  
行く末のことも，来し方の不行跡をもとに理解してしまう。

最近，やつが宮廷を留守にしたいと

言い出し，その許しを無理やりわしから

もぎ取ったことについても常ならぬほど気が揉め，

疑念が萌している。お前たちは兄弟同士，昵懇の仲だから，

心に抱く弟への信頼から，わしの疑いを和らげようとする

[30]

大義名分を形あるもののごとく作り上げているかも知れぬ。

ロデリック 弟の暇乞いの理由はわかりかねますが，

最近の日付で届いた手紙にはこんなことが書いてあります。

カミローさんの息子のジューリオなる者がおりまして，

（弟によると，手紙を追いかけるようにこちらに向かうということですので，

その到着を今か今かと待ち構えているのですが）

その男を遣わして，黄金の返済を請求し，その金で

気に入った馬を購入したいらしいのです。

弟は，このジューリオなる者とフランスで知り合ったそうで，

「兄貴，どうかよろしく頼む，

[40]

そちらに何日か滞在させてやってくれば，

自分が信頼しているだけのことがある男だとわかるはずだ」と言うのです。

公爵 おお，そうしてくれ，ロデリック，そのジューリオとかいう男を

お前の弟の放蕩ぶりを探るための誠実なるスパイに仕立て上げるのだ。

その若造が到着したら，わしのところに連れて来い。

そのジューリオ君とやらと会って，友達から言いつかった

内密の貸金とやらを支払ってやろう。

この屋敷に連れて来てくれ。

二人退場。

## 第1幕第2場 遠くに村の眺望

カミローが手紙を手にして登場。

カミロー いったい，どうしたことだ，公爵が息子に目を留めて下さり，宮廷に侍らせたいというのは？ この手紙を読み次第，息子を宮廷に送るようにと書いてあるが。馬術の腕前だと！ジューリオにどんな馬術が備わっているというのだ？ 乗用馬を普通に走らせるぐらいしかできないと思うが，ひょっとしてフランスで乗馬の稽古でもしたのだろうか。そうかもしれない，結構長い間フランスにいたのだからな。それにしても馬術について息子の口から聞いたことはな

い。まあ、どうでもいい。たとえ乗馬が得意でなくともこの際関係ない——つまり息子は重責に耐えねばならぬ。君命は絶対的だからな。彼らは、自分たちのできないことを除いては思い通りにできるのだから。 [11]

ジューリオ登場。

おお、息子よ、この手紙を読むがよい。(手紙を渡す) まあいいから、まず読め。この手紙の返事は私の手による書面でもなく、お前の手による書面でもなく、つまりお前の一身で、他でもないお前自身を捧げて応えねばならぬ。声に出して読んでみろ。

ジューリオ 後生ですから、まずはざっと目を通させてください。

カミロー 先日はお前が新しい服をあつらえたのが気に食わなかったが、今思うに、運命が仕立て屋となって服をあつらえてくれたのだ。公爵の宮廷にこそお誂え向きの服だからな。お前の父親の家はみすぼらしすぎる。 [20]

ジューリオ (傍白) ふん、宮廷へ出仕だと？ どちらがいいかわかりきっているじゃないか、恋人に仕えるのと公爵に仕えるのでは？ 俺は公爵の奴隷になるよう求められ、俺自身はレオノラの奴隷になることを求めている。

カミロー その手紙では、お前の馬術の腕前がずいぶんと褒められているだろう？ お前、乗馬が得意だったか？

ジューリオ これまでも乗り姿について褒められたことはありましたが、あるいは嘲笑だったのかも。

カミロー 褒め言葉も三つに一つは嘲りだからな。人から褒められようなどと思わないことだ。この手紙には命令と懇願が多く入り混じっておる。拒否することはできん——行ってくるのだ。公爵は有無をいわせぬ形で強く主張しておられるからな。 [32]

ジューリオ (傍白) 行ったところで私が出会う運命は幸運ということにはなり得まい。別れねばならぬ恋人が他の良きものを味気ないものにしてしまうのだから。

カミロー お前は行かねばならぬぞ。公爵は懇願するというより召喚しておられるからな。

ジューリオ (傍白) 今は私のレオノラへの求婚を父に聞いてもらう時ではないな。

カミロー 小さな地所から大きな富という幸運が育つことがあるものだな。

ジューリオ (傍白) 彼女のお父上は俺のことをどう思うだろう、まさに今夜求婚の伺いを立てられるのを待っているはずなのに？ [41]

カミロー 息子の中にばらばらに散らばっていた美徳の破片を、宮廷が一纏めにして接合し、<sup>うわ</sup>糊薬を塗って修繕してくれるだろう。

ジューリオ (傍白) 彼女のお父上は間違いなく私が軽々しく、礼儀に悖る、愚か者だと思うだろう。—いやそもそも、俺は不誠実だ、父の同意を得たと信じ込ませようというのだから。その実、父はまだこの要求については耳にもしていないのに。

カミロー さて息子よ、読み終わったか？

ジューリオ はい、父上。 [50]

カミロー 考えてみたか？



ジューリオ できる限りは。

カミロー お前が幸運に請われているのならば，行かねばならん。

ジューリオ 仰せの通りに。

カミロー なんとしてもだ，明日までに。手紙に要求の期限が書いてあるだろう？

ジューリオ はい，父上。

カミロー お前が備えの足りない人間に見えないよう，必要なものを考えねばならん。わしがどんなものでもすぐに整えてやろう。わしの部屋にすぐに来なさい，そこで話をすることにしよう。

[62]

退場。ジューリオ独り残る。

ジューリオ あの娘には熱情というものが見られない。

若さと恋が火をつけるはずの熱情が。彼女は同意してくれたが，その様はまるで食欲がないまま食事をするかのよう。

彼女は口では嬉しいと言いながら，つれない娘を演じている。

たくみに言葉を防具に仕立て上げ，愛の剣のひと突きを寄せ付けまいとする娘たちのように。そのような愛情は

上部を装っているだけで，触れられずとも壊れてしまう脆いものだ。

雪解けの前に凍ったまま死ぬも同然。一方，俺の愛情は

[70]

太陽神ヒューペリオンの眼下の気候と同じく，

絶えない情熱の火に燃え続けている。すぐ彼女のところに行こう。

僕の名譽を顧慮するようお願いするのだ——だが待て，彼女の方からやってきたぞ——

レオノラと侍女が登場。

見よ，彼女の美しさが地上を豊かにする様を！

ああ，そこにあなたの可愛らしいお声という音楽，

朝を目覚めさせる雲雀のように甘美な音楽を加え，

ここが本物の樂園だと私に悟らせたまえ。

あなたを探しに行こうと思っていたところです，レオノラ，

そしてあなたをつれなさを<sup>たしな</sup>窘めに行こうか，と。

レオノラ お父様は何ておっしゃったの？

ジューリオ まだちゃんと話をしていないのです。

レオノラ ではもう話をしないで，ジューリオ。 [80]

ジューリオ 父に話をしない？ あなた自身のご命令ではありませんでしたか，

父の同意が我々の恋を承認すべきだというのが？

レオノラ 多分そうだったわ。でも今はもう心が変わったの。

あなたはこの買い物に高い値段をつけすぎているのよ，

私に求愛してかつお父様の同意を取りつけようとして。それに

おそらくお父様はあなたが私と結婚すべきではないと仰って，

従順なあなたはご自分の気まぐれな恋心から私を外に出さざるを得なくなるでしょう。そうしたら、お分かりと思いますが、私にとっては恥と悲嘆。そのような拒絶にあって私の若さの盛りに柳の枝<sup>1</sup>を身にまとうことになりますから。

[90]

ジューリオ そのような的外れな疑いで私を苦しめないでください。たとえ老齢ゆえに私の父の胸から恋の炎が消え去ったとしても、それで父に目がないだとか、判断力が鈍っているなどとは思わないでください。それにあなたもご自分の美を軽んじておられる。ヴィーナスから授かった贈り物を蔑むと、女神も顔をしかめることでしょう。あなたのお顔は、冷厳な隠者でさえもそれにキスするためなら岩屋から飛び出し数珠玉を燃やしても構わないと思わせるのですから。あなたのお目も、その光線を目にした者の中に絶えず新しい欲望を生み出させるものです。それを疑う道理はありません。

レオノラ どうしてなの、ジューリオ？

[100]

あなたがお父様のお許しなしにはあえて選ぶとなさらず、愛していてもその愛を保証できないとき、あなたには目がおありだけど、ご自身の目で見てはいないのよ。私だって、幾分かあなたへの求愛に悪影響を受けたかもしれないけど、黙って座って、あなたが私を欲しいけどあえて選ばないというのに同意できるとでも？

ジューリオ あり得ないことに疑いを膨らませないでくれ。

それは不親切な扱いというもの——こう言っちゃなんだが君には似合わないよ。というもの君に備わっている資質の全ては優美に飾られた美質ばかりだからだ。僕の望みを妨害するものがあるとすれば、ただ理性が我慢を強いるような重大な遅延のみ。それは僕たちの愛を鈍らせるのではなくかえって鋭く研ぎ澄ますのだ。我慢しておくれ、愛しい人よ。

[110]

レオノラ 我慢ですって？他に何をしろと？私の情炎はまだ焚きつけられていません。

夫を失えば涙を流すかもしれませんが、夫が欲しくて泣くはずもありません。自由を失うことがわかっていて、結婚という束縛を求めて泣きわめくはずがないじゃありませんか。

ジューリオ どのような気持ちから、このようなことを？

今なら、はっきりとわかります、あなたは私のことを愛していないのですね。公爵様、召喚に従います、その真意がどのようなものであっても。戦争であれば、兵士になりましょう。あるいは、宮廷で私の絹のように贅沢な時間を浪費し、

[120]

<sup>1</sup> 柳は伝統的に、失恋や愛する人との死別を連想させる植物。日本には、柳（しだれ柳）から幽霊を連想する慣習があるが、イギリスでは、この連想の結びつきは一般的には存在しない。



流行の奴隷となり，生涯，怠惰な追放の身となるとしても  
喜んで受け入れましょう，

レオノラが私の破滅を宣告したのですから。

レオノラ 何のことでしょう？ どうして公爵様のことをおっしゃるの？

どうして，戦争や，宮廷や，追放のことを？

ジューリオ この新たな私への注目がどのように生じたか知らないが，

公爵が手紙で私を呼び出しておられるのだ。私たちのことで

父に話をしに行くと，父がこの手紙を

読んでいた。その内容はすぐに私が

宮廷に行き，奉公するのを求めるものだった。

[130]

レオノラ 今ならこの遅れがどのように生じたかわかります，

どうしてレオノラがあなたの求婚に値しなかったかが。

宮廷に行くですって？ ええ，あなたはおそらく，

いや，むしろ疑いなく，そこでご覧になることでしょう，もっと美しい人，

魅力豊かな人，お世辞の手管に慣れた人を。

あなたは大胆な気持ちになり，

言うのです，「お喜びください，父上，私は

この女性を私のものと決めました」と。

ジューリオ いつも私を誤解する。

ずっとあなたの<sup>しもべ</sup>下僕であると言っているのに。

心変わりです，私の名誉を汚したりはしません。

[140]

たとえ海と陸にあるすべてのものに代えても。

レオノラ でも，いつ行くのです？

ジューリオ 明日です，恋人よ，公爵の命令にそう書いてあるのです，

別れのキスの時間も与えず，

きちんとした別れや大事な誓いをいくつも交わす時間も，

あまりに無礼な性急さで切り詰めようというのです。

恋人たちには話すべき大事なことがたくさんあります，

君主や夢想的な政治家が知っている以上に。

このような作法はキューピッドの玉座に伴うものです。

どうしてため息をつくのですか？

レオノラ ああ，ジューリオ，別れの時でなかったら，

顔を赤らめるようなことをささやかせてください。

[150]

私の胸が不安で激しく鼓動するのは，華やかな場，

宮廷の壮麗さがあなたの胸から私の姿を追放し，

あなたの中の私への関心を殺し，

残された私は嫁ぎ損ないとのあざけりを受け，

あなたの失われた誓いに未亡人の涙を流すのではないかと。

ジューリオ ああ、言葉がつなぎとめうる限りの強さで保証しましょう、  
喜んでください、私はこの上なく忠実です。  
太陽がその光り輝く軌道に、  
影が闇に、欲望が美に忠実であるがごとくです。  
私が正しい道から逸れるときは、これまでの欺瞞や心変わりが  
受けてきた中で最も大きな不幸が私に降りかかればいい。 [160]

レオノラ もう十分です、納得しました。私はこれからも  
あなたのもの、固く、変わらぬ貞節を誓います。  
ご不在の期間が長くなりませんように。老人は揺らぎやすい、  
誓った約束よりも利益によって動かされます。  
あなたが離れている時に、新しい申し出があれば、  
私の忠実、私の従順を拷問台にかける何かに  
押しやられてしまうかもしれません。

ジューリオ 心配ありません、最速の時の翼で  
帰よう努めましょう。私が不在の時には、  
私の立派な友人で、今は私の尊敬する客人、  
エンリケ卿が私の代わりとなり、  
あなたの父上の耳元に、友好的な舌から注がれた  
親切な助言で、私の申し出を保証し、  
不在のジューリオの代わりに恋人役を演じるでしょう。 [170]

レオノラ 友人が不誠実になった例はないのでしょうか？  
お気をつけください。代理の愛はありません、ジューリオ。  
私の父上は――

ドン・バーナード登場。

ドン・バーナード どうした、ジューリオ、人前で？ この求婚はあまりに緊急だ。御父上はまだ  
求婚について納得していないのだろうか？ この件は、まずは彼次第なのだが。 [181]

ジューリオ 実のところ、私が従うべき父上に  
まだすべてを打ち明けたわけではありませんが、  
追い求める女性がいるとは伝えてあります。

ドン・バーナード 追い求めるだと？ 追い求めるなんぞほっておけ、そういう問題ではない、君  
が追い求めていると称する娘だが、追いかけるまでもなく捕まえられる。ただし、御父上がお前  
を狩りへと解き放ってくれない限り、ありえない話だぞ。要するに、私はお前にこれ以上求婚し  
てほしくないのだ（このように言うのも、娘が言うには、私の指示が娘にとって、目となり足と  
なるからだが）、私が以前から言っていたように、カミローが私たちに好意的であるとわかるま  
ではな。そう言ってくれさえすれば、すべては解決だ。その時までには、この件が現実になること  
はないし、始まりさえ見つからない。 [193]

ジューリオ 眠る前には父上の考えを知るつもりです。

朝には父上の意向をお知らせします。

お暇致します。—ああ、貞淑なレオノラ、

お休み、君の美しさのように甘く心地良い眠りによって、その目を閉じてくれ。

もう一度、さようなら。約束だよ、愛する人。

覚えていて、そして忠実でいて。

退場。

ドン・バーナード 彼の性格が気まぐれなように、彼の父も移り気だ。もし若いジューリオの気性が彼の母の気性で直されていなかったら、この結婚に同意を与えるのは良くないと考えていただろう。そして、実を言うと、もし私の目がお前の考えの導きとなるのなら、この町にはより選り抜かれた男が20人も見つかる。お前の彼への愛情を弱めようとして、こう言うのでは全くない。私が言おうとしているのは、お前が自分を彼に売り渡そうとしている売値でなら、多くの彼よりマシな男たちが喜んで買うだろうということだ。(そして、お前の美德を彼らにとって稀なものとして考えている。) 彼がいなくても、お前にはもっと良い買い手が残っている。 [212]

レオノラ 私の従順は父上の助言につながれています。

ドン・バーナード 良く言った、賢明だぞ。お前の恋人には、やや愚かなところがあるのが心配だ。

本当にそうであれば、すぐにお前は後悔することになる。

レオノラ 正直に申しますと、私が知るすべての男性の中で、彼こそ承認するに値すると考えております。しかし、その承認は、父上の同意が得られるまでは無きに等しいものです。

ドン・バーナード 彼の父がどうするつもりか、すぐに知ることになるだろう。そして、それに従って進めて行くことになるだろう。この件に対して私は強い思いもなければ、荒々しく反対するつもりもない。この御縁を支配する運命の力に委ねよう、何らかの決着がつくはずだ。さあ、家へ急ごう、娘よ。

退場。

### 第1幕第3場

エンリケが灯りを手にした従者たちとともに登場。

エンリケ 灯りを近くに。楽師たちはどこだ？

従者 ただいま参ります。

エンリケ あまり近過ぎないように配置しろ。

(傍白) この乙女を思って、

わが溜め息は冷たい夜霧に乗る。

彼女は最も卑しい生まれだ。たとえ彼女が

自然の最も豊かな型と技によってこれ以上なく美しく造られ、

強い想像力で補修されているとしても。

だが、それがどうしたというのだ？ 生まれの卑賤さなど、

あの瞳の煌めきをかき消すことはできない。

彼女を一つの光と成して輝かせるあの瞳の煌めきを。

(楽師たちに向かって)

さあ諸君、演奏を始めてくれ。 [10]

だが、恭しく爪弾いて、

夜の鈍い耳に音をもの悲しく響かせるのだ、

憂鬱がその怠惰な寝椅子から立ち上がるまで。

そしてつれなさが関心へと改まるまで。

音楽が奏でられる。

(傍白) 彼女が話すのをときどき聞くが、

まったく驚かされるばかり。

噂や推測から知るのみの宮廷について、彼女は熱く語る。

まるで七代の治世にわたって時勢を中傷してきたかのように。

そして、彼女が自国の状態について、

健全さ、美德、簡素、質実を論じ、

[20]

技巧を潔しとせず、肩書きにたがわぬ美、

善きことを考え、実践する自由について語るとき、

わが心は生まれと空虚な身分にうんざりし、

願望の中で私はただの村人になる。

(楽師たちに向かって) 音楽を続けよ——彼女はあまりにぐっすり眠っている。演奏をやめて、立ち去るのだ。

従者たち退場。

日の輝きが彼女の窓から突然煌めき漏れ出した。

ああ、かの真夜中の手に祝福されし蠟燭の灯よ！

ヴィオランテが上方の窓辺に現れる

ヴィオランテ こんな夜遅くに言い寄ってくるのはいったい誰？ あなたはどなたですか？

エンリケ 私は愛しいあなたのために——

ヴィオランテ

星なき天の下、夜を徹して愛を捧げていらっしゃる！

エンリケ様ですね、そのお声、聞き間違うはずがありません。

[30]

私のお返事はすでに差し上げました。なのに、なんとおかしいことでしょう、

あなたがその拒絶に抗おうとなさるとは。エンリケ様、

ご自身の健康を大事になさいます。そして私を部屋へ下がらせていただき、

この哀れな私の評判を護らせてください。あなたが苛まれていると誓う

苦痛がどのようなものであれ、それを哀れむことはありません。

あなたの極め付きの愛情とやらを私という日陰に植えつけることは不可能です。

少なくとも、そこで育つことはありません。

エンリケ

どうしてだ、ヴィオランテ？

ヴィオランテ ああ、残念ながら、あなたの目的を阻む理由が

数えきれないほどございます。もっと健全な時間をお過ごしになるようにしてください、  
こんな時間に寝ずの夜を過ごしても無駄になりますから。いくつかお話で読んだことがあるので  
す。 [40]

(本当にありそうで怖いほどです) あなたのよう若い貴族が、  
恋わずらいを詩に詠んでは身分卑しい窓辺でこのように歌い捧げ、  
瀆神のそしりを受けるほどにまで、  
私のような身分卑しい女たちを偶像として崇め奉り、  
挙句の果てにその女を捨て去っては、安易に信じてしまったことを嘆かせ、  
世間の侮蔑の的になった、というようなお話を。

エンリケ あなたの記憶が、  
数少ない破滅した乙女たちの不幸をあまりにも忠実に刻んでいるために、  
不安を一般化し過ぎてしまうのです。

ヴィオランテ 私たち庶民の女に素朴なままでいさせてください。  
そして貞節も守らせてください。あなた方貴族の誓いを  
言葉通りの気持ちがかもっているものと受け取るとしたら、 [50]  
かえってご迷惑以外の何物でもありますまい。双方が信用し合わなければ、  
どちらも出し抜かれる恐れはないわけですから。お引き取りください、エンリケ様！  
あなたがお話になることはまったくの的外れ。お歌いになる歌は  
調子が合わず、耳障りです。そればかりか、あなたの香水、  
ここまで香って来ますその匂いは、私の感覚を元気づけてはくれません。  
私たちの野のスマイルの息吹のようには。

エンリケ でも、このように退けられることこそが、  
ますますとどまりたくなるよう誘うのです。

ヴィオランテ あなたのようなご気性の殿方は  
すべてを茨に変えて、棘のせいで動けないとおっしゃる。でも、こんなに  
長々と話をしているのは、私が護ろうとしている、わが乙女の名に、  
傷をつけてしまいます。あなたの美德が、より崇高な目的を達成するよう、 [60]  
あなたを導いてくれますように。 ヴィオランテ、退場。

エンリケ 行かないで、輝く乙女！  
戻って来て、私に少しでも明るい望みを残してください。  
行ってしまった——私はいったい誰なのだ、このように侮辱される私は？  
公爵の次男か？ そうだ。だが、だから何だというのだ？  
そう、おまえの高貴な生まれが卑しい縁組に身を落とすことを  
禁じているのだから。彼女は公爵の血筋の私たちが作られた材料と  
まったく同じ材料で作られているが、もっと純粋な粘土だ。  
私から称号なんか取り去ってみるがいい、それは私自身で  
獲得した訳ではなく、運命によって私に投げ与えられたものに過ぎない。  
あるいは、特異な資質を持った祖先の功績によって [70]

得られたもの。彼女が実際に授かっている美点は私よりも優っている。私は身を落として彼女を勝ち取らなければならない。華やかな装飾はすべて投げ捨て、称号などという高慢な付加物を使うことを止めるのだ。それらを保持して主人と成すよりもずっとよい。われらが身につける威厳は驕りの賜物であり、賢者からは笑われる、ただの外面に過ぎぬと。

退場。

(続く)